

乳がん検診の読影媒体の違いによるがん発見率の変化

公益財団法人宮城厚生協会坂総合病院 ○田中 由紀(Tanaka Yuki)

村松 香織 鳥畑 暁子 武田 斐子

【はじめに】

塩釜地区の乳がん検診は2005年度から2施設方式、撮影施設と読影施設を別の施設で行い、医師会で再度フィルム読影を行う方法で行っていた。

検診対象者は40歳以上の偶数年齢の方で、40歳台は2方向、50歳以上はMLOのみ撮影している。

撮影施設は現在6施設で、撮影総件数は年間約8000件である。

2021年度よりフィルムレス運用を開始し、2023年度よりほぼ比較読影ができるようになった。2023年度のがんの症例が増えたので、モニタ診断による比較読影が影響してのではないかと考え、フィルム読影、フィルムとモニタ、モニタのみで要精検率、がん発見率について比較検討したので報告する。

【対象】

2018年度から2023年度に塩釜地区で乳がん検診を受けた47546名で、2018年度2019年度は2施設方式、2020年度はフィルムで読影だが、塩釜医師会にて医師2名で読影、2021年度と2022年度はモニタ読影で過去検査はフィルム、2023年度からはモニタ読影になった。

【結果】

受診者数は、2018年度、2019年度は8000人を超えていたが、2020年度からは8000人に届かず、2023年度は7605人まで減った。いかに受診してもらえかが課題となってきている。

要精検数は2施設方式だった2018年度、2019年度は438、488件と多めで、2020年度認定医師のみの読影になり279件と少なくなり、モニタ診断が始まった2021年度から404件、348件、386件となっている (Fig.1)。

要精検率も同様の傾向になっている (Fig.2)。

2023年のがん症例数が多くなっている (Fig.3)。がん発見率は、症状がある症例を除いたとしても発見率が、2022年度以前は0.2%台だったが0.46%と高くなったことがわかる (Fig.4)。

がん発見数の内訳は、フィルム読影、モニタとフィルムの読影だった2022年度以前は20～25症例、モニタ診断になり比較読影が容易になった2023年度は43症例だった。

各年度の初回受診者のがん症例数の変化はあまりなく、受診歴がある症例のがんが多くなっている (Fig.5)。

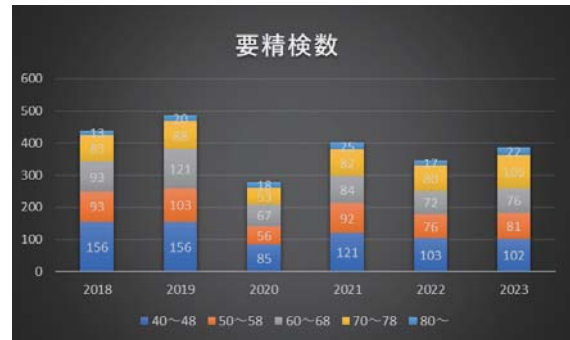


Fig.1



Fig.2

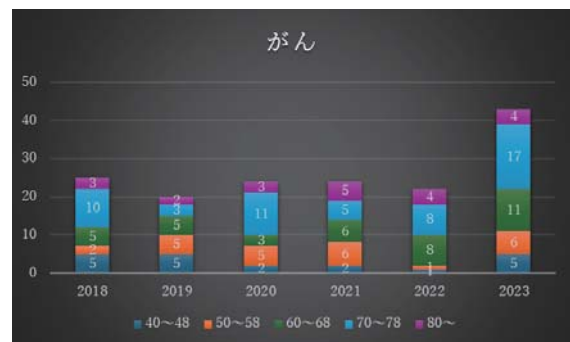


Fig.3



Fig.4



Fig.5

【まとめ】

現在、モニタ診断が4年目になり、画像の蓄積ができて比較読影が容易に行われるようになった。また、読影医師も高齢化が進んできたが、大きい

モニタで画像を見るシステムに慣れてきてもらえた。

比較読影ができるので、見落としも少なくなっていると思われるが、フィルム読影より、実寸表示、全体表示、ピクセル等倍、比較と画像を見る時間がどうしても長くなってしまうため、読影件数は少なくなってしまう。しかし、がん発見率が高くなったことは、比較読影を行ったためと思われる。

今後も乳がん検診の精度を高めるために放射線技師としてポジショニングを頑張っていきたいと思う。

【参考文献・図書】

マンモグラフィによる乳がん検診の手引き 精度管理マニュアル 第8版